

岐阜マザーズコレクションの作品制作に対する学生の意識

Students' Attitude for the Making Process of Gifu Mothers Collection

村上 眞知子

Machiko MURAKAMI

Abstract

During the process of completing of the 3rd Gifu Mothers Collection, students of fashion design/fashion business courses studied fashion trend, fashion illustration, pattern making and sewing. They were divided into five groups. Each group consists of six students of fashion design and fashion business courses, makes their own concepts, trend theme and a series of coordinated cloths. After the event their attitudes during the project were investigated for the steps of selecting materials, designing the dresses, pattern making and constructing. The results were compared with those of the 2nd collection.

Keywords: 岐阜マザーズコレクション、作品制作、学生の意識

1. はじめに

(社)岐阜ファッション産業連合会との産学協働事業としての「岐阜マザーズコレクション」は今年度で3回目を数えた。1回目、2回目は主催団体が(社)岐阜ファッション産業連合会青年部であったが、今回は同連合会(以後本報では「連合会」と略す)の実行委員会が主催する形となった。前2回の成果と反省点を踏まえて、第3回では、ファッションショーによる作品のプレゼンテーションに終わるのではなく、具体的に学生の作品の商品化を目指すことで、産学協働の意義を明確にすることを大きな目標として事業を企画した。この目標設定に対してどれくらいの実績が得られるかを検討するためにも、今年度は同連合会の主催で参加は本学のみとした。

具体的な事業の進行、成果の評価に関しては、平川による報告に詳述されている¹⁾。事業の大きな目的設定に関しては昨年度の報告に示しているが²⁾、今年度は、新たに「商品化」の可能性を探ることを目的に加えた。指導するうえでも、「できれば商品として取り上げてもらえるといい」ではなく、商品として企画制作するためのトレンド研究、デザイン企画、素材選定と、日程調整を行った。

2. 事業の概要

事業の実施過程における、昨年度との違いは、①パターンメイキング以降の課題、フィッティング、工業パターン作成、縫製を夏季集中の授業(演習2単位)として単位化したこと、②素材提供が、岐阜アパレルで使用している生地が残反や、羽島市・毛織会館に隣接するテキスタイルマテリアルセンター(以後本報では「羽島マテリアルセンター」と略す)に集まった生地を中心として収集し、そのなかから素材を選定する

のではなく、岐阜のアパレルに生地を提供しているテキスタイルメーカーでの素材購入になったこと、③商品化のために、アパレルメーカーを対象として内覧会を設定したこと、④作業環境を改善するために、演習室の空調運転時間を延長したこと、である。トレンド分析、マップ制作とプレゼンテーション、ポスター制作などに関しては、昨年とほぼ同じ日程で進めた。今年度のファッションデザイン専修の学生構成は、ファッションデザインコース14名、ファッションビジネスコース16名である。昨年度は、両コースとも13名で、総数では今年度のほうが4名多い。前年度と比べてカリキュラムの変更は、制作過程が夏季集中の演習科目として認められたこと以外はない。

第2回で設定されたテーマは、「60年代エレガンス」(7)、「ブリティッシュ・レディー」(8)、「リッチ・ストリート・ミックス」(7)、「グラマラス・マスキュリン」(9)、「ロマンティック・フェティシズム」(7)の5テーマ38アイテムであったのに対し、第3回では、「ロマンティック・スポーツ」(9)、「ジェントル・ウーマン」(8)、「エレガント・ミリタリー」(10)、「センシュアル・マダム」(6)、「グロウ・オブ・バロック」(7)の5テーマ40アイテムであった。テーマに続くカッコ内の数字はアイテム数を表す。上衣と下衣のセットアップ(スーツ)は上下で2点と数えてある。

3. 調査方法

昨年に引き続き、2年間という限られた就学期間の中で、外部団体との協働による事業参画が、どのような教育的効果をもたらすのか、地域貢献といえるだけの成果を得ることができるかということ、昨年の反省を反映させた結果が、学生

表 1. 素材に関する設問項目と回答

	2012			2011		
	思う (%)	思わない (%)	平均	思う (%)	思わない (%)	平均
① 繊維名、織物名、編布と織布の違いや名称を理解できた	90	10	3.1	73	27	3.0
② マルキョウテキスタイルさんの活用が役に立った	97	3	3.4	88	12	3.4
③ 生活材料学で学んだ知識を活かすことができた	80	20	3.0	77	23	3.1
④ 素材物性(かたい、やわらかい、ドレープ、など)を、シルエットに活かせた	97	3	3.4	92	8	3.5
⑤ 作りたいシルエットに対してどのような素材を選択すべきかわかった	87	13	3.1	92	8	3.3
⑥ 繊維、織物、編布素材の名前を言われてもわからなかった	57	43	2.7	58	42	2.6
⑦ 自分の決めたテーマに合う素材を見つけるのが大変だった	93	7	3.4	81	19	3.0
⑧ 素材にあった縫製条件(アイロン温度、糸の太さ、針の太さ)を理解できた	77	23	3.1	81	19	3.0
⑨ 衣服アイテムの名称を理解し覚えることができた	100	0	3.5	96	4	3.4
⑩ 使いたい色柄の生地が手に入らなかった	47	53	2.5	54	46	2.7
⑪ 集められた生地の色傾向が偏っていた	53	47	2.7	58	42	2.8
⑫ 集められた生地の素材(羊毛、綿など)傾向が偏っていた	50	50	2.5	62	35	2.7
⑬ 使える生地量が少なすぎた	17	83	2.0	65	35	2.8
⑭ 扱いにくい生地を選んでしまった	87	13	3.2	65	35	3.0

表 2. トレンド分析に関する設問項目と回答

	2012			2011		
	思う (%)	思わない (%)	平均	思う (%)	思わない (%)	平均
① トレンドテーマを決めるのに迷った	60	40	2.7	46	54	2.4
② テーマを決めていく過程(テーマ、カラー、素材、シルエット)が難しかった	80	20	3.2	65	31	2.9
③ トレンド分析の結果を素材選定に反映できた	83	17	3.0	69	31	3.1
④ マップ制作を通して企画をアピールする方法が身についた	63	37	2.9	81	19	3.0
⑤ マップとデザイン画が一致していた	77	23	3.1	85	15	3.3
⑥ トレンド分析の結果をデザイン画に反映できた	90	10	3.1	81	19	3.2

表 3. パターンメイキングに関する設問項目と回答

	2012			2011		
	思う (%)	思わない (%)	平均	思う (%)	思わない (%)	平均
① 造形演習、パターンメイキング論での知識や技術を活かすことができた	67	33	2.9	92	8	3.4
② ドレーピング演習の知識や技術を活かすことができた	63	37	2.9	48	43	2.5
③ 中高年の体型の特徴を知ることができた	83	17	3.2	96	4	3.6
④ 中高年の体型のパターンメイキングが難しかった	83	17	3.4	100	0	3.8
⑤ 正確なパターンメイキングの必要性が理解できた	83	17	3.2	92	8	3.7
⑥ シーティングの扱い方を再度学べた	83	17	3.2	96	4	3.8
⑦ 地の目の重要性を再認識した	97	3	3.5	100	0	3.8
⑧ トワールのマーキング、トレースを正確に行なった	93	7	3.3	88	12	3.4
⑨ 平面と立体の関係を理解できた	70	30	2.9	85	12	3.3
⑩ 体型に合う人台の調整に時間がかかった	73	27	3.1	77	23	3.2
⑪ 工業パターンの展開(布厚みの計算、いせの配分など)が理解できた	73	27	2.9	77	23	2.9
⑫ 切り替えが複雑過ぎた	57	43	2.6	27	73	2.2
⑬ 素材の特性をパターンに反映した	63	37	2.7	69	31	3.0
⑭ 作りたいシルエットをパターンに表現できた	70	30	2.8	88	12	3.2
⑮ 教員の指導が理解できた	67	33	2.8	92	8	3.2

にどのように評価されているかを検証するために、事業実施後にアンケート調査を行なった。今年度の実施後アンケートでは、上記の変更に伴って設問内容を一部変更したが、昨年度との結果の比較のためにその他の設問に関しては同じ内容

である。その内訳は、1. 素材に関する質問(14項目)、2. トレンド分析に関する質問(6項目)、3. グループワークに関する質問(7項目)、4. パターンメイキングに関する質問(15項目)、5. 縫製に関する質問(15項目)、6. やってよかった点(15項目)、

7. 今後改善するとよい点(8項目)と、8. 自由記述である。回答は、各設問に対し、「そう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の中で当てはまるところに「○」を記入してもらった。調査は、ファッションショーが終了してから約3か月後の12月中旬に行い、参加者30名のすべてから回答を得た。時期としては、直後ではなく、マザーズコレクション事業のすべてが終了し、さらに大学祭ファッションショーや卒業研究発表会を終えた時期で、ある程度一連の進行を客観的に振り返ることができる。

3. 結果と考察

3.1 素材

表1は、素材に関する設問とそれに対する回答結果を示す。結果は、それぞれの設問に対する回答数の総回答数に対する割合で示している。平均点は、「そう思う」に4、「ややそう思う」に3、「あまり思わない」に2、「思わない」に1を割り振り、それぞれの回答者数を乗じた和を回答者数で除した値を示す。素材の調達については、昨年度は既存の生地、すなわち岐阜のアパレルで用いられ市場に供給した製品に用いられた生地を、学生ならどのようにデザインし作品にしていこうかという興味から、過去にアパレル各社で使用された残布の中から選択していた。また、羽島マテリアルセンターに集められた岐阜県産の素材から選択していた。結果として、持込残布素材は殆ど使用されず、殆どが羽島マテリアルセンターで収集した生地を使用することとなった。このため、今年度は、トレンド研究をし、その結果選択した学生のデザインが損なわれないようにという配慮から、連合会に加盟し岐阜のアパレル各社に素材を提供しているマルキョウテキスタイル株式会社から素材を購入することになった。併せて一部の素材は昨年同様羽島マテリアルセンターから購入した。②の回答結果から、平均点では、素材調達の変更の効果はあまり見られないが、「そう思う」、「ややそう思う」の回答数%の和では、昨年より11%も上回っている。意図した風合い、色、柄の資材を得ることができる方法に変更した効果は十分にみられる。この結果は、⑪、⑫における素材の選定における偏りの結果、⑬の使える生地量に対する満足度にもあらわれている。しかし、素材知識が十分でない状況では、多種多様な素材が揃っているだけに、⑦の結果にみられるように、適した素材を見つける困難さを感じた学生は、昨年より12%多い結果となっている。また、⑭の結果にみられるように、視覚的な好感に気をとられて結局扱いにくい生地を選んでしまったと回答している割合も多い。学生の感性で企画する中高年世代のデザイン提案とそれを可能にする自由な素材選定が昨年度の課題としてあげられたが、この課題は今年度の素材提供システム

ではほぼ解決され、学生の評価にも結果として出ている。羽島マテリアルセンターの生地も一部に使用された。

3.2 トレンド分析

トレンド分析に関しては、昨年と同様ファッションビジネスコースの学生が中心となって、専門教育科目「ファッショントレンド研究」のグループ演習として実施した。6月の4コマの授業において、ファッションデザインコースの学生も授業に参加した。表2は、トレンド分析作業の過程における設問と回答を示す。学生にとってトレンドを分析し、実際の企画に落とし込む作業は初めての経験で、決して容易なことではない。①トレンドテーマを決めるのに迷った、②テーマを決めていく過程(テーマ、カラー、素材、シルエット)が難しかった、では昨年度に比べて「そう思う」割合がかなり多くなっている。また④マップ制作を通して企画をアピールする方法が身についた、では昨年度に比べて「そう思う」と回答した割合が小さい。同じ指導方法後のテーマ設定、デザイン決めた割合が小さい。同じ指導方法後のテーマ設定、デザイン決定、素材決定の過程を経ているにもかかわらず、今年度のほうが消極的な回答が増えている一方で、⑥トレンド分析の結果をデザイン画に反映できたでは、今年度は90%の学生が「そう思う」と回答している。実際に身についたスキルなどについて、実感が持てていないが、検討の結果を視覚的に表現した結果には満足している学生が多くいる。平均点では2012年度のほうがやや値が小さいが、「そう思う」に対して「ややそう思う」の割合が多いため結果である。

3.3 グループワーク

表3はグループワークに関する設問とそれに対する回答結果を示す。今年度も本事業の教育的効果として期待したのが、グループワークと協業を通じて、専門性を活かしたチームワークの有効性と重要性を学ぶことである。今回も、テーマを決める段階からグループ作業とするために、学生を5つのグループに分けた。昨年度は、ファッションデザインコース、ファッションビジネスコースの学生のバランスを考慮しながらも、グループのメンバー決めは学生の裁量に任せた。今年度は同様の配慮をしながら、教員側で構成員を決めた。役割分担としては、トレンド分析、マップ制作はファッションビジネスコースの学生が、パターンメイキングや縫製はファッションデザインコースの学生がリーダーシップを取る体制を期待した。それぞれ専門のコースに所属する学生が専門的に作業を分担するのではなく、あくまでもリーダーとして機能し全員がその作業に就くということを目指したが、期待通りには作業は進まなかった。ドレーピングを含むパターンメイ

表 4. 縫製に関する設問項目と回答

	2012			2011		
	思う (%)	思わない (%)	平均	思う (%)	思わない (%)	平均
① 造形演習での知識や技術を活かすことができた	80	20	3.1	96	4	3.5
② いろいろな部分縫いの知識が深まった	87	13	3.2	92	8	3.5
③ 正確な縫製の必要性(例えば「真直ぐ縫う」)を再度学んだ	93	7	3.5	96	4	3.7
④ 素材に合った縫い方、縫い代始末の知識が深まった	97	3	3.3	92	8	3.5
⑤ 表地に適した接着芯地の選択が理解できた	70	30	2.9	77	23	3.0
⑥ 柄あわせが大変だった	70	30	3.1	58	42	2.6
⑦ 作りたいシルエットで仕立てあがった	87	13	3.0	92	8	3.4
⑧ 縫いやすさ、扱いやすさを考慮せずに、生地を選択した	80	20	3.0	77	23	3.0
⑨ ポケット、衿付けなど部分縫いの方法をしっかり理解できた	77	23	2.9	76	20	3.0
⑩ 縫製技術に関する知識の不足を感じた	93	7	3.6	96	4	3.6
⑪ 縫製工程が多いアイテムだった	93	7	3.2	58	42	2.6
⑫ 縫製工程順を理解できた	73	27	2.9	81	19	3.2
⑬ プレス機、バキューム機などの機器を有効に使えた	83	17	3.2	77	23	3.2
⑭ ニット素材の縫製が学べた	63	37	2.8	58	42	2.7
⑮ 教員の指導が理解できた	60	40	2.8	92	8	3.3

表 5. グループワークに関する設問項目と回答

	2012			2011		
	思う (%)	思わない (%)	平均	思う (%)	思わない (%)	平均
① グループの決め方がよかった (FBとFDの混ぜ方、名列順)	47	53	2.3	12	88	1.8
② メンバー間の意見のまとまり、コミュニケーションがスムーズだった	67	33	2.8	92	8	3.3
③ リーダーシップをとる人間がいた	77	23	3.2	81	19	3.3
④ 役割分担(リーダー、サブリーダー、フォロワー)がうまくいった	63	37	2.9	65	35	3.0
⑤ グループ内で、メンバー相互を補いあいながら作業ができた	73	27	3.0	69	27	3.0
⑥ チームワークがうまくいった	73	27	3.0	88	12	3.4
⑦ 作業が特定のメンバーに集中した	73	27	3.1	50	50	2.4

表 6. 実施してよかった点に関する設問項目と回答

	2012			2011		
	思う (%)	思わない (%)	平均	思う (%)	思わない (%)	平均
① ファッションビジネスの業務の流れを体験できた	77	23	3.0	85	15	3.2
② デザインと素材、シルエット、パターン、縫製の関係を理解できた	87	13	3.1	92	8	3.3
③ パターンの重要性を認識できた	90	10	3.4	100	0	3.7
④ グループワークの重要性を体験できた	90	10	3.4	92	8	3.6
⑤ トレンド研究、マップ制作ができた	93	7	3.4	88	12	3.4
⑥ 体型理解の重要性を認識できた	87	13	3.1	92	8	3.5
⑦ 正確な採寸の重要性を認識できた	93	7	3.4	96	4	3.6
⑧ 岐阜地域のアパレル産業を理解できた	50	50	2.6	50	50	2.5
⑨ 商品としてのものづくりを体験できた	87	13	3.2	81	19	3.2
⑩ 自分に不足している知識、技術を把握することができた	93	7	3.5	96	4	3.6
⑪ 自分とは異なる年齢域を扱うことで多様な志向性を理解することができた	83	17	3.2	88	12	3.2
⑫ 素材知識を深め実際の企画、デザインで使うことができた	67	33	2.9	77	23	3.0
⑬ ものづくりの楽しさと厳しさを体験できた	90	10	3.5	96	4	3.5
⑭ 市長賞など多くの賞を設定してもらえた	63	37	2.7	77	23	3.4
⑮ 教員の指導がわかりやすかった	52	48	2.7	88	12	3.2

表 7. 今後改善してほしい点に関する設問項目と回答

	2012			2011		
	思う (%)	思わない (%)	平均	思う (%)	思わない (%)	平均
① GMCのコンセプトを明確にして示して欲しい	70	30	3.0	92	8	3.6
② 審査結果の受賞理由、選外理由を明確にして欲しい	80	20	3.1	92	8	3.5
③ 使える素材の多様性を確保して欲しい	73	27	3.0	96	4	3.4
④ 作品の商品化への道筋を考慮して欲しい	77	23	3.2	58	42	3.0
⑤ 制作する作品の体型、サイズを統一して欲しい	87	13	3.4	69	31	3.1
⑥ 作業環境を整備して欲しい(エアコンなど)	93	7	3.7	100	0	3.9
⑦ ショー発表をより多くの人々に見てもらえるよう、方法を考慮してほしい	73	27	3.2	92	8	3.5
⑧ 教員の指導が厳しかった	100	0	3.7	96	3	3.6

キングや縫製、デザイン画やハンガーイラストの描画に関しては1年次で全員が基本的なことを修得している。①の設問設定は、今年度の決めかたに併せて「グループの決め方がよかった(FBとFDの混ぜ方、名列順)とした。昨年度の場合、①は「グループ決めがたいへんだったか」という設問に対して、大変だとは思わずスムーズにグルーピングができ、構成員のコミュニケーションもかなりスムーズにとられていた。今回は、専門コース、力量などのバランスを考慮しながら教員側でグループを決めた結果、②のコミュニケーションのスムーズさにおいて、③役割分担においては、「そう思う」の回答は70%に至っていない。そして、⑦作業が特定のメンバーに集中したかの設問に対して、70%以上が「そう思う」と回答している。本来のグループワークに対する期待とはややかけ離れた結果となったことについて、考察する必要がある。

3.4 パターンメイキング

表4はグループワークに関する設問とそれに対する回答結果を示す。パターンメイキングは、今回も一連の作業の中ではかなりの時間と労力を費やした。「ファッション造形演習」や「パターンメイキング論」、「ドレーピング」といったカリキュラムの中で経験を積み重ねてきている領域であり、このことについて①で「ファッション造形演習」や「パターンメイキング論」での成果との関係を問うた。昨年度は90%以上が活かすことができたという回答に対して、今回は同質問に対する回答がわずか67%で、3人に1人は活かすことができなかったと回答している。科目担当者として、授業後に実施される授業評価との関係をみながら、授業で学んだことが広く応用できる力として身につく方法を考えなければいけないのかもしれない。

今年度は、新たに予算措置された、本事業に対する本学の補助金によって、ミセス用のドレーピングダミーを新たに購入し、ダミーのサイズ調整にかかる時間と労力を若干ながら軽減させることができた。また、今回もモデルサイズで制作を進めたが、平均値から大きく外れる体型が少なかった。そ

のため④中高年の体型のパターンメイキングが難しかったに対しては、昨年より「そう思う」の回答が17%少なくなっている。また⑩体型に合う人台の調整に時間がかかったに対しても、「そう思う」の回答が若干少なくなっている。

パターンメイキングについては、平面製図とドレーピングを何度も繰り返し手完成パターンを作り上げていく。その過程で、トワールのマーキングや正確なトレースは必須の条件で、教員は何度も何度もその必要性を説いている。その結果は、⑧では「そう思う」の回答は93%で昨年より若干多いが、⑨平面と立体の関係を理解できた、⑭作りたいシルエットをパターンに表現できた、ではその回答はいずれも昨年度より低くなっている。デザインの詳細とパターンメイキングの関係を考慮に入れる必要があるが、昨年よりパターンメイキングに対する学生のきびしい姿勢がやや少ないように思われる。

3.5 縫製

表5はグループワークに関する設問とそれに対する回答結果を示す。①の設問に対する回答から、縫製に関しても「ファッション造形演習」の授業での学びの経験が5人に1人は、活かされていない結果で、昨年度の96%に対して低い。さらに今年度は、⑮教員の指導が理解できたか、の設問に対して「そう思う」の回答が60%で、5人に2人が「あまり理解できなかった」と回答している。

学生が表現したいデザインと、それを形に仕上げていく過程での困難さのバランスが、縫製の困難さの評価と直接にかかわってくると思うが、今年度は⑩縫製工程が多いアイテムだった、に対して93%が「そう思う」と回答している。テーラードジャケット及びそれに類するジャケット・コートの制作枚数は、昨年度の9点に対して今年度は6点と、縫製に関する工程の多い衣服の制作に関しては、昨年度よりむしろ少ない。またこれらのアイテムについては、ファッションデザインコースの中でも比較的縫製力のある学生が担当していたことを考えると、この回答数の割合は多すぎる。今年度は、テキスタイル専門企業で、ある程度学生らの自由な采配で素材を選

択することができた。最終決定には、教員の助言もあったが、結果として、レース、チュール、ペロア、薄手ギャバジンなどの素材が多く、全体として高度な縫製技術が求められた。

3.6 総合評価

表6に実施してよかった点について、表7に改善を求める点について、設問と結果を示す。また、本事業の実施による教育効果については、前報で述べているが、今回についても、その目標設定を踏襲し、さらに昨年度より前進した成果を求めていた。つまり、作品の商品化ということである。そのための具体的な計画として、作品がほぼ完成し出揃う8月下旬に、アパレル企業を招いた内覧会の実施を組み入れた。実際には、予定した日時で作品展示ができたのは一部で、縫製にも不備が目立った。「実施してよかった点」についてみると、昨年より「そう思う」の回答割合が多かった項目は、⑤トレンド研究、マップ制作ができた、⑨商品としてのものづくりを体験できた、だけである。①ファッションビジネスの業務の流れを体験できた、では8%マイナスになっている。⑧岐阜地域のアパレル産業を理解できた、では昨年度と同率で、「そう思う」の回答割合が50%である。地域のファッションビジネスに携わる人材との交流を通して、ファッション産業への理解を深める、地域の産業の課題と展望を探るといふ本事業の目的を達成するための方策を、今一度考える必要がある。結局素材選定、ポスター制作、内覧会、そしてファッションショーの機会を通して、学生は本事業の連合会実行委員会委員と接する機会があるが、どの機会においても、岐阜のアパレル産業の現状や今後の展望について討論することなく終わってしまった。産学連携を進めるときの、相互が共有すべき展望、大学が教育効果を上げつつ地域の活性化にも資することができる方策、産業が大学およびそこで学ぶ若い学生の何に期待するのか、それが産業の展望とどう関わっていくのか、を明確にしなければいけない。

「今後改善してほしい点」については、②GMCのコンセプトを明確にして示して欲しい、では昨年度の96%の学生が「そう思う」と回答しているのに対し、今年度は70%に過ぎない。③審査結果の受賞理由、選外理由を明確にして欲しい、では昨年度は9割以上の学生が「そう思う」と回答しているのに対し、今年度は8割である。⑤作品の商品化への道筋を考えて欲しい、は内覧会を実施した効果もあって、昨年度よりは割合が大きくなっているが、8割り以下である。自由記述の中には、グループ決めて力量バランスを上げる学生が数名いた。本学の入学者傾向として、年々ファッションビジネスコースへの進学希望者が増加し、したがって入学者のファッションビジネスコースとファッションデザインコースの学生数の比は、前者のほうが多くなる傾向にある。授業を進める際には、

リサーチ、分析、立案する分野と、デザインシパターンメイキング、縫製をする分野のバランスが重要になってくる。基本技能としては両コースとも全領域にわたる分野のカリキュラムを履修していることから、まずはこの基礎技能をしっかり身に付けさせることが最低の必要条件である。そのうえで、コースに分かれて磨き上げた深い専門知識と技能を発揮する場を提供しなければいけない。

4. まとめ

今回で3回目を迎えた岐阜マザーズコレクションを、学生の視点で振り返り、その結果を昨年度の評価と比較する中で、より効果的な、地域への発信、地域産業との交流について考察した。事業の意義はどこかにあるはずだからと、産学のどの立場からも模索状態で3年を終えた。しかしこの事業は、過去の岐阜アパレルの業態の上に積み上げられている。その在り方が議論されないまま、明確な展望を持たないまま進めていけば、やはり昨年同様学生には「仕方なくやっている感」や「負担感」が出てきてしまう。今年度の不十分な点だけの修正で、また来年度も継続するのではなく、来年度は学生が本当にやってよかったと思えること、大学の力が地域の活性化に活かすこと、そして地域の産業も前進できることに対する方策を考えたい。

謝辞

アンケート調査に協力してくださった生活デザイン学科ファッションデザイン専修2年生に感謝する。また、本事業の一部は、本学の行政施策に係る研究費により実施した。

文献

- 1) 平川すみ子、「第3回岐阜マザーズコレクション —産学協働による産地再創造をめざして—」、岐阜市立女子短期大学紀要第62輯、p. 127-132 (2013)
- 2) 村上、平川、「岐阜マザーズコレクションの作品制作とカリキュラムの位置づけ」、岐阜市立女子短期大学紀要第61輯、p. 79-84 (2012)

(提出日 平成25年1月11日)